The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>James Pilditch & Douglas Scott : The Business of Product Design, Business Pubucations, London
Author(s)	柳原, 明彦
Citation	デザイン理論. 1968, 7, p. 109-110
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52510
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

James Pilditch & Douglas Scott:

The Business of Product Design,

Business Pubucations, London

プロダクトデザインの分野に於ける最近のイギリスの動きは、イタリアのそれと並んで目をみはるものがある。ことに量産家具、家庭用機器の分野では、今日のデザインの動向を二分してこの両者が相競っていると云えよう。感覚的要素を強く打出した冒険的なイタリアデザインに対して、徹底した合目的性とそれにもとづく明快な造型を特徴とするイギリスデザインと、この世界でも云い古されたいわゆる両国の国民性が如実に現われているのが面白い。

ことに興味深いのは、つい数年前までは組織的なデザイン活動はおろか単発的なデザインにすら程んど見るべきものがないと云われたイギリスデザイン界のみごとなカムバックぶりである。19世紀末、近代デザイン活動への門を開き、その道の先駆者を任じたイギリスは、今日に至って再びデザイン界のリーダーシップをとり戻しつつあると云っても過言ではない。斜陽といわれるイギリス、伝え聞く頽廃と無気力とはうらはらに、この様な新しいエネルギーの台頭を見るのは一つの驚きである。

イギリス工業デザイン界に対するこのような好奇心から最近読んでみたのが二人のイギリス人第一線デザイナーによる共著"THE BUSINESS OF PRODUCT DESIGN" である。本書の内容は著者自身冒頭に述べているように、デザイナー、技術者、企業家などを対象とした工業デザイン啓蒙のためのテキ

ストブックとも云うべきもので、数あるこの種の啓蒙書と比して特に目新しいものではない。〝良い製品とは何か〟に始まって、デザイン組織、企画、調査設計、製品化、人間工学、コスト、材料、工程、などについて平易な解説が続く。

この書を特徴づけているものは、二人のフリーランスデザイナーの豊富な体験に基く至って具体的な記述であろう。それは随所に現われる具体例にも、又巻末の8編のケースヒストリーにも見られる。数々の実例は何れも著者自身苦しんだ問題であるが、それだけに強く訴えるものがある。

これらの具体的な記述に見られる著者の終始一貫した態度は、〝いかにすれば売れるか〟であり、〝いかにすれば競争に勝てるか〟である。このあたりクライアントに依存するフリーランスデザイナーの偏狭とも受取れようが、それもここまで徹底すればみごとである。著者はこの目的達成のための条件を一つ一つ実例に照らして懇切丁寧に解説していくのだが、それはあくまで合理性に立脚したいわば最も常識的な解答ばかりと云える。しかしこの常識の積重ねこそが良い製品を生み出すのであるという著者の信念は、とりもなおさず今日のイギリス工業デザインの水準を支えている力の一つではないだろうか。

ともあれ、最低限の要求さえ満していない数々の製品を前にして、常識的なことを実行することのむつかしさを感じると共に、著者の挙げるきわめて常識的なデザイン条件の一つ一つをあらためて認識させられたのである。

工業デザイン実務のテキストとして良し、デザイン啓蒙書としてもわかり易く、又デザイナーの読みものとしても面白い。イギリスのデザイナーの活動情況を知るには恰好の書物である。学生諸君には手頃な英文解訳のテキストでもあろう。

A 5版 166頁 写真21葉

京都工芸繊維大学　柳 原 明 彦